

ライプニッツにおける可能的な個体の成立の問題

菅原 領二（慶應義塾大学）

ライプニッツはよく知られているように可能世界論を展開した哲学者である。ライプニッツによれば可能世界は可能的な個体により構成される。ここでの「可能的」とは論理的に矛盾せず、未だ存在していないくらいの意味である。この個体の集合がそのまま可能世界となる。そして神は複数の個体集合の中で最も本質が多いものを現実存在させる。これはライプニッツの最善世界説に結びつくモデルでもある。

本発表はこのように世界の構成原理である可能的な個体がいかにして成立するのかを問うものである。先行研究は少量ながらもこのトピックを問題にしてきた。例えば Guéroult, Fichant, Gaudemar の研究である。しかしどの研究も可能的な個体の成立を体系立てて解明しているとは言い難い。この状況を鑑み、本発表では個体の成立に関してその在り処と材料、方法を明確化する事を介して体系的な再構築を行う。かいつまんでいえば次のようになる。

可能的な個体の在り処、これは神の知性である。可能的な個体は幽霊のような純粹本質の領野にあるのではない。この在り処を特定する事は個体を作る材料と方法の解明に大きく寄与することとなる。

ついで、材料は神の完全性である。何らかの肯定的な属性や性質の最大値が神の完全性である。注目されるべきはこのライプニッツは完全性に存在を含めないという点である。存在は完全性ではないという主張は<可能的>個体と材料となるにふさわしい。なぜならば、もし個体の構成に存在が導入されるのであればこの個体は直ちに現実存在してしまい、もはや<可能的>とは言われなくなってしまうからだ。

最後に方法である。これは神の自己認識である。神の自己認識という発想自体はアリストテレスから存在し、目新しいとはいえない。しかしライプニッツの独創性は自己認識の具体的な仕方にある。ライプニッツにおける神の自己認識は自らの完全性を無限に多くの仕方で組み合わせる事にある。材料のレベルでは全て個体は同一であるが、組み合わせの多数性によりそれらは区別される。

発表者は以上のように構成のプロセスを再構築することで可能的な個体の成立の問題に関する究明を目標とする。